

「認知症世界の歩き方」：笈 祐介（かけい ゆうすけ） 人の顔は千変万化するため、人を顔では識別しない村【顔無し族の村】

－認知症のある人の頭の中をのぞいてみたら？－

《この村に一步足を踏み入れると、みんなが同じ顔に見えたり、同じ人でも時々で顔が変わって見えます。つまり、この地では、顔が個人を決定づけるシンボルではない！？村人たちはお互いを、声や身体の特徴・雰囲気、何よりもその人との思い出で記憶し、つながるのだと言います。》

この人どこかで会ったような気がするけど自信がない、誰だかわからない、名前が出てこない、そんな経験は誰にでもあるでしょう。

実は、顔を見て正しく人を認識するというのは、簡単なように見えて、ものすごく多くの情報を統合しながら行う、とても高度な認知機能なのです。

◆ 人の顔を見分けるって実はとても難しい

- ① 『会社で勤務中に「担当のお客様がいらした」と連絡があり、受付に行ったのですが、フロアを見渡しても、どの人が自分の馴染みのお得意さんなのかまったくわからなかったのです。
そして対応中も、ちょっと手元の資料に目を落とした後、お客様の方に向き直ると、そのたびに顔が違うように見える気がしたのです。』
- ② 『町中を歩いているときに、通りすがりの人が自分の知り合いの顔に見えたので、私から親しげに声をかけたら、まったくの別人で、げげんな顔をされたことがあります。
ナンパと勘違いされてしまうんですね』
- ③ 『この前おもしろいことに気づいたのです。アニメであれば、似たような2人の女性のキャラクターを間違えることなく見分けられたのです』

◆ 同窓会を活用した興味深い実験

『卒業後、25年経った同窓会に出席したメンバーの顔写真を撮影し、この同窓会の欠席者に、その写真はだれ顔を特定してもらったところ、顔の変化にもかかわらず、高確率で同窓生の現在の顔を予測し、特定することができました。』

一方同窓生とは全く関係のない被験者に同窓会当日の写真と25年前の写真を提示したところ、正解率は低かったのです』

- ① 写真上では25年前の顔と現在の顔がかなり違って見えたとしても、実際に会ったり話したり、同じ時間を共に経験したことがある人の方が、脳内で様々な記憶が「想起」され、同一人物であると判断できるのです。
⇒ 人は顔・形の記憶だけでなく、様々な情報を引出し、照合することで、目の前の人か誰であるかを判断しているのです。

◆ 馴染みのお客さんの顔がわからない理由

- ① 私たちは、人の顔をアニメのキャラクターを見るときのように「二次元」のものとは捉えていません。
現実に見る顔には、目のくぼみや鼻の膨らみといった起伏がありますよね。
つまり、向きや陰影によって見え方が変わる「三次元」の情報です。それを認知することは、アニメや写真を見ることよりも高度な行為というわけです。
- ② 複数の情報を統合することが難しいという理由もあります。
人の顔を見分けるには、目・鼻・口といった細部の形ではなく、それぞれのパーツの位置関係から人の顔を見分けていることが、専門家の研究から分かっています。
認知症のある方の場合、目や鼻や口といった個々のパーツは認識できても、それらを統合し、1つの顔として判断するのが難しくなることがあるのです。

★ 「心身機能障害と」その障害が原因と考えられる生活の困りごと

1. 人の顔を正しく認識できない

- ① 通行人が知り合いに見える ⇒ 街を歩いていると、周りの全員が自分の知り合いに見えることがある
- ② 家族や親しい友人の顔がわからない ⇒ 家族や長い付き合いの友人の顔と写真を照合してもわからない
- ③ ドラマの登場人物の顔がわからない ⇒ 登場人物の顔が見分けられず、話が理解できない。しかし、アニメのキャラクターの顔は認識できる。
- ④ お客さんの顔がわからない ⇒ 写真と見比べても、目の前の顔と一致しない。

次回は連載その6 「何人もの冒険家が砂漠の横断に失敗し遭難してしまう【サッカク砂漠】」